

中部大学で出会ったすばらしい学生たち

石 井 章

はじめに

私の職業生活ははじめから教員をしていたわけではない。60歳で定年を迎えた第1の職場は、学生のいない研究所であった。その間非常勤で大学で教えたことはあったが、専任の教員になったのは第2の職場である高知大学に赴任してからである。65歳で再就職した中部大学は私にとって第3の職場である。したがって当然ながら自分と学生との年齢差は大きい。

私事で恐縮だが私には子供が3人いるが孫はいない。末っ子の次男が私が43歳のときの子供である。高知大学のときには、学生は次男と同世代だということで納得がいった。中部大学で接する学生は自分と45～50年、年齢が離れている。自分の末っ子より年若く、さりとて孫でもない若者と接する機会は、中部大学に就職しなければならなかったであろう。そういう機会を与えてくださった中部大学に感謝している。

中部大学国際関係学部の学生に対する世間の評価がどのようなものであれ、私はなかなかのものではないかと思っている。もっともこれは平均値ではなく、下を見てもしょうがないが、上を見ればいい学生が何人もいるのである。学部には優秀卒業論文の表彰制度があり、私も審査委員を務めたが、毎年の受賞論文の質の高さはたいしたものである。学業面とは別に人物をみれば、これまた見どころのある、人間的魅力のある若者がいるのである。

学部では少人数教育、教員と学生との身近な関係を通した指導を心がけており、ゼミ形式の授業を重視している。1年生向けの基礎演習と2年生向けの研究入門に関しては、どの先生につくか学生の方で選択する余地はなく、クラスに振り分けられる。それに対して3年・4年と連続する演習A・Bに関しては学生の方で先生を選べる。2年の秋学期の一学期間に学生は複数の教員と面談したうえで、どの先生のゼミにいくかをきめる。

私のゼミにきた学生についていえば、これまでに問題のある学生がいなかったわけではないが、以下に述べるようないい学生が来てくれたことをありがたく思っている。これらの若者と接することによって、私は間違いなく元気を与えられた。

1. 北海道出身のW君

W君は中部大学生には珍しく、北海道は札幌の産である。音楽が好きで学外のバンドに所属し、ベースやギターを奏する他、歌も歌う。よくギャグをとぼすが、これはダジャレの類でそれほど面白くない。

卒論のテーマは、はじめはジャマイカ出身のレゲエの神様ボブ・マーリーをやると言っていたが、途中からアルゼンチン・タンゴのアストル・ピアソラに変わった。論文のなかで「私にとっての音楽、それは切っても切り離せないものである。音楽は私の生活の一部になっている」、「音楽は私にとって<人生の教師>である。今まで数え切れないくらい多くのことを教えてくれた」と言っている。音楽に対する熱い思いが伝わってくる。

マンガ風の絵を描くのも得意で、私は彼に似顔絵を何枚も描いてもらった。彼は休暇で北海道へ帰省したときとか、就職活動で東京へ行ったときなど、ゼミの仲間のためによくお土産を持ってきてくれた。そういうふうな気を遣う人である。そして優しい。



W君が描いた石井の似顔絵。実物より大分若い。

あるとき彼が履修していた「フィールドワーク論」のレポートに「身近にいる年配者（おそらく60歳以上）にインタビューして、そのライフヒストリーを聞き書きすること」という課題が出された。普通の学生はおそらく自分の祖父母の1人にインタビューしただろうが、彼の場合はそのために北海道まで行くわけにもいかず、というわけで私に「白羽の矢」が立った。そういうパーソナルなことを人に語るのは照れくさくて私はあまり好まないのだが、W君の態度にいや味がないので受けた。彼は私の研究室にテープレコーダーを持ち込んで、私の生い立ちから、親兄弟のこと、子どものころの遊び、学校生活、就職、結婚、職業生活、子どものことなど、2時間近くにわたり聞き書きした。彼が書いたレポートのコピーはいま私の手許に保存してある。W君と私をつなぐ貴重な文書である。

2. 誕生日が同じKさん

誕生日が年末にあたる私は、これまで自分と同じ誕生日の人に会ったことがなかった。私と同年で、誕生日が1日違いという人はいるが、中部大学のゼミ生に自分と同じ誕生日の人がいるとは。これを知ったときには2人とも驚いた。ちなみに2人の年令は47年達う。

Kさんと私はゼミ生たちから2年続けて誕生日を祝ってもらった。もっとも誕生日当日は冬休み期間中に入るものでその日ではなかったが、最初の年にはゼミ生たちの寄せ書きのカードを2人がそれぞれもらった。2年目にはデコレーションケーキを買ってきてくれて、69歳と22歳の2人がナイフを入れた。

Kさんは明るい人である。そしてどこかアツケラカンとしたところがある。Kさんははじめ卒論のテーマにラテンアメリカの農業問題を取り上げたいといていた。私の専門に近いところである。しかし都市問題の方にしだいに彼女の関心は移っていった。ラテンアメリカにおける近年の急速な都市化の進展は、農業の問題、農村から都市への人口移動と密接に結びついているから、この関心の移りは自然のことだ。卒論の追いこみ段階に入った11月になって、Kさんはヨーロッパ旅行に出かけた。早い段階で就職がきまって気楽になっていたこともあろうが、それにしてもこの時期に。しかしKさんは手抜きしたい加減な卒論を提出したかといえば、さにあらず。質量ともになかなか充実したものを仕上げた。Kさんは学部の優秀卒業論文の候補に自分の論文をエントリーした。残念ながら受賞はなかったが。Kさんは学業成績が優秀なのである。私と誕生日が同じだから。べつにこれは関係ないか。

3. 笑顔のすばらしいTさん

2001年度入学の彼らが3年生になってゼミに入ってきた年に、学長杯争奪学科対抗スポーツ大会が始まり、3年生を中心に学生運営委員を出すことになった。Tさんが硬式野球部のマネージャーをしていることを知った私は、彼女を運営委員として強く薦めた。それ以来、ゼミで飲み会をやるときにはその幹事役に、というように何かにつけTさんが引っ張り出される。4年生になって、卒業アルバムや記念パーティーの準備のために各ゼミから1人ずつ世話役を選ぶ段になったら、こちらからお願いするまでもなくTさんが「ハイ」と手を挙げた。そういう人がいてくれると助かる。世話好きなのだが、けっしてでしゃばりではなく、押しつけがましくない。だから嫌味がない。

なんといっても人と接するときの彼女の笑顔がすばらしい。硬式野球部の女性マネージャーはTさん1人ではないが、基本的に男性社会である野球部にTさんのような女性がいることで、どれだけ雰囲気ながよかになっていることか。そんなTさんが高校は女子校の出身だと聞いたときにはちょっと意外な感じがした。これは女子校というものにある特定のイメージを抱く私の偏見というべきか。

Tさんは子どものころヴァイオリンを習っていたとか、あるいはクラリネットが吹けるとか、なかなか多才である。学部の外国語はドイツ語を専攻し、ドイツに短期留学したこともある。また中国の少数民族にも関心がある。そんな彼女がメキシコ、グアテマラのマヤ系少数民族の民族衣装への関心から私のゼミに来てくれた。ご縁というものである。彼女はゼミの雰囲気づくりに大いに役立ってくれた。

私のゼミのメンバーが中心ではない、ある年の恵那研修に、Tさんは請われてアシスタントの1人として参加した。就職活動と重なる忙しい時期である。3月の事前研修に参加して帰ってきた彼女は「私自身楽しんできちゃった」と言った。人と接することが好きで、要するに人が好きなんだね。

4. リーダーシップのMさん

恒例となった春の学科対抗スポーツ大会の時期になると、学科ごとに教員の担当者をきめ、学生運営委員を選出しなければならせない。学生運営委員は競技に出場する選手を集めなければならず、これがなかなか大変である。さらに学科独自のTシャツを誂えるような場合はその手配もしなければならない。こんな面倒な仕事はなかなか引き受け手がない。前述のTさんもそうだが、積極的にやってくれる人がいると助かる。MさんとOさんは3年生のときと4年生と2年続けてスポーツ大会運営委員を引き受けた。



2004年、学園祭でのゼミ生たち

Mさんはクラブ活動はE S S (English Speaking Society) に所属し、またクラブ運営委員会でも活躍している。2年生の春学期にはオハイオへ長期留学している。このように大学で学業やアルバイト以外に積極的に活動している学生は輝いて見える。彼女にはなかなかリーダーシップがあり、また弁もたつ。Mさんはヨーロッパの少数民族であるロマ（ジプシー）に興味を抱き、とくにスペインのロマを卒論のテーマにしたいと、私のゼミに来了。3年生からスペイン語を履修している。

新入生対象の恵那研修の際の上級生アシスタントは、国際文化学科の場合、その年度の恵那研修担当教員のゼミ生が当たることになっている。2005年度は私が担当教員であり、私のゼミから5人と渋谷ゼミから男子学生1人に参加してもらい、6人がアシスタントになった。6人のアシスタント・グループのリーダーに私がMさんを指名したのは、彼女のリーダーシップを買ったからである。

年によってはアシスタントがあまり積極的に動かず、担当教員が苦勞することもあると聞くが、私の場合はそんな心配はまったく無用だった。すべてアシスタントたちにまかせて、私は外から見守るだけで十分だった。この6人のアシスタントのチームワークが非常によく、事前準備のために何度も打合わせの会を開き、長時間かけてプランを練った。そのリーダーシップをとったのがMさんである。彼らのつくったプランの一つにクイズラリーがある。学科の全教員に前もってクイズ問題を出しておいてもらい、参加者（1年生）はグループ単位でトリムコースを歩きながら、途中のポイントごとに掲示されたクイズ問題の解答を記入し、正解を競うというものである。

恵那研修は新入生のために設定された行事であるが、アシスタントとして参加した学生にとっても、私にとっても楽しい思い出として記憶に残っている。

5. やる気と行動力のOさん

Oさんは2年生の春学期に「研究入門A」の私のクラスにいた学生である。学期末に小レポートを課したが、Oさんのレポートを読んで私は「なんて稚拙な文章だろう」と思った。そのレポートにあまりいい点を与えなかったのだが、いまもう一度読み返してみると、そこからふつふつと沸き起ってくるような彼女の意欲を感じず。彼女にはやりたいことがいろいろあって、いくつものアイデアが湧き出してくるものだから、それが十分に整理しきれない文章になってしまったのだ。でも言いたいことはよく伝わってくる。

Oさんにはやりたいことがあって、やる気がある、そして行動力がある（そのどれもがない若い人もいる）。国際関係学部に入ってくる学生は外国のことになんらかの関心をもっているのが当然だから、在学中になんらかの手段により外国へ出て行って欲しい、それだけでなく外国人と関わりをもつて欲しいと私は思っているが、Oさんは大学入学前の十代のときにイギリスでホームステイの体験をしている。そして大学2年の終りの春休みにスペインでホームステイしている。また彼女は1年生のときからカンパセーション・パートナーとして外国人留学生の相手役を買ってでている。さらに日本語教員免許取得を目指して頑張っている。

世の中には自分のやりたいことがあって、やる気もあるのだが、いざ実行に移す段になると逡巡してなかなか一歩を踏み出せない人がある。私はそういう人をダメな人間だとはいわない。むしろその人には見所があると思う。自分は何が好きなのか、何をやりたいのか分からない、という人もいるのだから。Oさんはやりたいことがあって、やる気があるだけでなく、やりたいことをすぐ実行に移す行動力がある。

昨年の秋、私のゼミ生たちが学園祭にゼミ単位で模擬店を出すことになった。出し物はメキシコ風タコスとグアバ・ジュース。やろうと言いだしたのは3年生のOさんである。3年生だけでなく4年生も巻き込んで取り組むことになった。学祭に模擬店を出すには、当日だけでなく、事前の準備、テントの設営や材料の買い出しなどいろいろ仕事が多く、結構な負担を強いられる。日本の社会通念では学年が下の者から上の者へそういうことを働きかけるのはちょっとやりづらいのだが、Oさんはそれをやった。それまで私のゼミの4年生と3年生とは交流がなく、互いに知り合うこともなかったのだが、学祭での共同作業を機に4年生と3年生とが和気藹々とした雰囲気でお交流するようになった。これはOさんの功績である。

Oさんは高校は普通科ではなく、美術科の出身である。大学の卒業論文ではメキシコの女流画家フリーダ・カーロを取り上げる。私も絵は好きだし（制作ではな

く鑑賞の方だが)、メキシコ研究者の1人としてフリーダ・カーロについてある程度のことは知っているが、いまにも血が流れ出してくるような痛ましい感じのフリーダの絵を私はあまり好きとはいえない。フリーダの夫で画家・壁画家として著名なディエゴ・リベラの絵の方がどちらかといえば好きだ。フリーダの生涯は、外から見ればまさに「痛ましい」と形容できるものだ。十代のときに交通事故で重傷を負い、障害を負う身となる。その後遺症に一生悩まされる。結婚してからは夫リベラの不倫に悩まされる。しかしそうした不幸にもめげずに昂然と人生に立ち向かった。世の因習や伝統に囚われずに、自立した1人の女性として47年の生涯を生きた。フリーダの自立した女性としての生き方にOさんが惹かれるのもわかる気がする。

メキシコというと後進国で日本より遅れていると思う人がいるかもしれないが、1930年代、40年代のメキシコにこんな自立した生き方をした女性がいたのだ。同じ時期の日本はどうだったかといえば男尊女卑、夫唱婦隨の時代であった。

Oさんは学業成績が優秀である。成績は学科内で常に上位をキープしている。しかしOさんはなんでも器用にこなす、いわゆる優等生タイプではない。むしろどちらかといえば不器用な方だ。だから失敗もするだろうし、挫折もするだろう。しかし彼女はそんなことは乗り越えて前進するだろう。やりたいことがあって、やる気があって、行動力があるのだから。

6. いざというとき頼りになるF君

高校生のころからゲバラのファンだったというF君は、ゲバラの肖像画をプリントしたTシャツを着ている。ソ連解体、社会主義圏崩壊からすでに久しく、キューバ革命もゲバラもおよそいまのはやりではない。世界で少なくなった社会主義国の一つとして幾多の困難に耐えながら孤塁を守っている国、というのが現代キューバのイメージである。

ゼミの振り分けの面談のときに、F君はキューバの経済危機と最近の経済改革をテーマにしたいと言った。F君は国際文化学科ではなく、国際関係学科に所属する学生である。この研究テーマなら関係学科にも適当な指導教員がいるにもかかわらず、彼は文化学科の私のゼミをわざわざ選んで来てくれた。

いまの世の中には大勢順応派、マニュアル人間、指示待ち人間が多いが、F君はおよそそういうタイプではない。ちょっと目には変わり者、へそ曲りに見えるかもしれないが、私に言わせればそういう人間の存在

は貴重である。自分の考えをもっており、それに従って行動する。かれは自分を知っている人である。

何事も日常のルーティンワークでうまくいくとはかぎらない。ひとつ歯車がはずれてうまくいかない、不都合が生じたようなときに、マニュアル人間、指示待ち人間だったらどうしたらいいかわからず、お手上げになる。そういうときはF君の出番である。なにもF君がやればすべてうまくいくというわけではない。彼も失敗することはある。しかしその失敗の仕方がサマになっている、つまり無様ではないのである。F君は一見ふてくされたような顔をしているが、けっしてふてくされているわけではない。もともとそういう顔なのだからこれはしかたない。

1年生のときから外国語はスペイン語を専攻し、スペイン語I～VIを履修した(2001年度入学生まではスペイン語I～VIが用意されていた)。そのうえで4年生になってから教養教育科目の「入門スペイン語」、「総合スペイン語」などを履修している。「専門科目のスペイン語VIを終わってから「入門スペイン語」でもないだろう」というと、彼は中部大学で開講されているスペイン語科目を全部履修するのだという。卒業に必要な単位をそろえたとか、就職に有利とかではなく、これはまったくの遊び心だろう。私にもそういうところがあるので理解できる。

ゼミではいつも面白おかしい言動で仲間を笑わせていた。どこまでが本当で、どこから作り話かわからないようなことを言って人を煙に巻くのが得意だった。みずから道化役を買っていたようだ。しかしF君は本当はテレ屋なのである。面白おかしい言動はテレ隠しだったのかもしれない。ふざけたような言動から、F君はふざけた人間と思われるかもしれないが、それは外面であって、話してみればわかるが基本的に人間としてまともである。だから信頼できる。

F君は卒業後すぐには就職しない道を選んだ。しかし私はまったく心配していない。社会の方でF君の働きを必要とする場がかならずあるから。もしも私が企業の人事担当者だったら(あり得ないことだが)、きっとF君を採用するだろう。いざというとき頼りになる男だから。

最後にひとこと

本稿は、まもなく職業生活を終ろうする(人生の終りではない)者から、これから社会へ羽ばたく若者へ向けてのエールである。

(教授 国際関係学部 国際文化学科)